

佐藤卓己著

『大衆宣伝の神話』

——マルクスからヒトラーへのメディア史——

飯田 収 治

本書は、現代史学の一環として、メディア史が成立しうることを示めそうとした、若き学徒にふさわしい大胆さと実験的意欲にみちた研究である。方法的にも、経験的な実証レビューでも、それは大きな成功をおさめている。分析の素材は、一八六三年の結党から一九三三年の崩壊にいたるまでのドイツ社会民主党（以下、慣例にしたがってSPDと略記する）である。この党の歴史に多少とも通じた者からすれば、これはきわめて適切な対象の選択といえる。党のメディア操作を考察の中心にすることによって、SPDの研究史に新たな一頁が加えられたことは確かで、しかも多くの点で従来への解釈に再検討をせまるものとなっている。

本書では、SPDの大衆宣伝は、一九世紀的な「市民的公共性」を前提とした、それに対抗的な「労働者公共性」の追求として、把握されている。これは、ハーバーマスの理念型としての「公共性」の枠組に対する一定の批判を踏まえたものである。本書がメディア史の経験主義的な個別研究にとどまらない、興行と広がり

をそなえる所以である。なお著者はつぎのような概念規定をしている。「本書では……価値概念としての公共性に対し、歴史的実体概念としての公共性をただ『世論を形成する社会関係』とのみ定義し、その社会空間を公共圏と呼ぶ。」

著者の実験的な姿勢を反映して、本書には簡単には要約しがたい、さまざまな道具立てと仕掛けをほどこした試みがなされている。ここでは、主としてSPD史の文脈にそくして本書を紹介し、そのかぎりでのコメントをつけ加えることにしたいとおもう。

本書は、「はじめに」につづく本文六章と終章とからなり、各章はワイマール共和国末期までのSPDの歩みにそって、ほぼ年次順に配列されている。以下まず、各章の内容を概観しておこう。

第一章「預言のメディアから予言のメディアへ」では、フェルディナント・ラサールの「一九世紀ドイツ最大のアジテーター」としての活動の軌跡と、その死後におけるラサール崇拜を通して、成立期のSPDを特徴づける「祝祭」メディアの意義が明らかにされる。ラサールの新聞批判と扇動遊説（「観閲式」）は、教養と文筆の「市民的公共性」を否定し、その枠外における「労働者の公共性」の対抗的な出現を告げるものであった。その過程でラサール派の演出する労働者祝祭が決定的な役割をはたした。祝祭の街頭デモ、宗教的な具現性……は、市民的公共圏には欠落した側面であり、その意識的な採用は、政治的公共圏への労働者層の独自の登場を意味していた。ラサールのカリスマ的独裁はその死後においてラサール崇拜に転化され、ラサール祝祭として定着する。著者はこれを「扇動演説と唱和、合唱、身体儀礼を組み合わせた豊穡なメディア空間」と評し、それが「宣伝の感性的・象徴

的導入」としてもつ機能を重視する。だが、ラサール崇拜が合理化され、SPDが近代化するなかで、政治祝祭を支えたラサールの情熱は枯渇してゆく。

G・マイアー以来、SPDの結党を「市民的民主主義からのプロレタリア民主主義の分離」とみるのが一つの常道であるが、本章はその過程をメディア史の観点からみごとに再構成してみせる。ラサールの歴史的な功罪も従来とは違った解釈が施される。彼の独裁やその個人崇拜は、これまでともすると否定的に評価されがちだったが、その常識が覆される。むしろ労働者の公共性の対抗的成立という観点からすれば、ラサールのアジテーションがどんなに豊かな可能性を秘めていたかが浮き彫りにされている。

第二章（「市民的啓蒙新聞から社会主義的大衆機関紙へ」）では、社会主義鎮圧法時代のSPDが扱われる。「鎮圧法時代を、マス・メディア時代への転換期」ととらえ、この特殊なメディア環境のなかで、SPD新聞が「啓蒙のメディア」から「宣伝のメディア」へと変貌する過程が活写される。これはSPD史のうえで、**「扇動政党」**から**「宣伝政党」**への発展の過程と位置づけられる。一八七〇年代の「出版自由体制」のもとで確立をみたSPDの新聞政策は、その体制への「例外法」である鎮圧法の制定によって大きな変更を強いられた。その結果、国外で発行された中央機関紙とは別に、政治的に無色なSPD系地域新聞が輩出した。ルイ・フィアエックとゲオルク・フォン・フォルマーの編集する地域新聞の内容を比較分析することによって、両者のイデオロギー的に対極的な立場の相違にもかかわらず、地域新聞が合法的な「投票者政党」にふさわしい大衆的な宣伝新聞の方向をたどっていた

ことが明らかにされる。一八八〇年代はまさに、営利的立場で「無党派派」を標榜して生まれた総合広告新聞が華々しく登場した時期にあたる。SPD地方新聞は、鎮圧法の重圧にもうながされながら、総合広告新聞との競合のなかで、新たなメディア環境に対応すべく、近代化を余儀なくされる。そして一八九〇年以降の中央機関紙『前進』も、そうしたSPD新聞の大衆化の流れの延長線上にあったことが確認されている。

この時代の党新聞に関する歴史学的研究はきわめて乏しい。本書にも登場する中央紙『社会民主主義者』が取りあげられるのがせいぜいで、それも基本的に党内の政治路線論争との関連で論じられてきた。SPD系地方新聞を正面からあつかえる分析視角が欠落していたのである。また「皇帝の御落胤」フィアエックの発掘、「宣伝的人間」としてのフォルマーの再評価、地方紙系「無色新聞」に対する新たな定義など、いずれもこれまでのSPD史研究にはみられない注目すべき研究成果といえる。

これにつづく一八九〇年代、世紀末のSPDの問題状況を論じたのが第三章（『読書する市民』から『感受する大衆』へ）である。ここではこの時期の『真相』とならぶ党の風刺漫画雑誌『南独郵便御者』を題材としながら、SPDの大衆宣伝（大衆レビューの社会主義宣伝）の、伝統的モラルに規定された限界が明らかにされる。個性あふれる風俗史家エドゥアルト・フックス編集の『南独郵便御者』は、既成の絵入り新聞の常識をこえる、圧倒的なイラスト重視を打ちだした。そこに著者は、「市民的公共圏の内部から公共性を拡大・開放していこうとする動き」ともいうべき、世紀末の文芸モデルネの影響をよみとる。その意味で市民的

風刺漫画雑誌『ジンプリツィムス』、『ユーゲンツ』との親和性が無視できない。だが著者による本誌のイラスト分析は、労働者大衆の心性にもっとも触れあう領域（宗教問題、婦人問題、ユダヤ人問題）において、『南独郵便御者』の宣伝が既存の大衆的感性に過度に依存していた編集姿勢をえぐります。それだけに一八九七年以後のフックスの「市民的モデルネ」への接近は、党内の伝統的な芸術観とも、黨員大衆の感性とも矛盾するものだった。彼の編集長解任は避けられなくなる。

SPD編集長フックスの再発見はもとより本書の貴重な成果の一つである。しかも著者は、その前衛性（＝周辺性）のゆえに異彩を放つこの人物の挫折を通して、古典主義（勃興したブルジョアの芸術）にとらわれたSPD文化運動の伝統主義的体質に光をあてる。それによって、SPDの体現する労働者の公共性が、市民的公共性の下位システムとして構築され、編成されていた現実が鮮明にされる。

第四章（社会主義マリァノスから国民国家ゲルマーニアへ）では、今世紀初頭から第一次世界大戦にいたる時期のSPDが考察の対象となる。本章の狙いは、そのSPDの大衆プロパガンダの代表的傑作ともいうべき『真相』（一八七八年～一九三三年）を分析し、躍進する「宣伝政党」期の党の相貌と、その後の「大衆組織政党」への変容をたどることにある。とくに「宣伝政党」編集部の構成と機能は、党がまさに労働者の公共圏を体現するものであったことを物語るが、その象徴的メディアが『真相』に他ならなかった。つまり黨員大衆の最大公約数が反映された機関紙であった。その紙面構成・内容の分析は、マスメディア『真相』

の成熟と衰退を描きだし、階級政党としての成長の限界点に達したSPDの実相を映し出す。また『真相』紙上に描かれた「社会民主主義」シンボルとそのイメージの変容（自由の女神マリァンヌからドイツ国民の守護神ゲルマーニアへ）は、SPDの国民国家への統合過程を示すとともに、党のシンボルの喪失をも意味するものとされる。「この結果、ワイマール共和国期の『大衆組織政党』SPDは、新時代の『扇動政党』、共産党とナチ党の夾撃に曝され、革命シンボルの不在、社会主義イメージの貧困に悩むことになる」と著者は強調する。しかも大衆社会化の進展とワイマール民主主義への移行のなかで、特権的で強固な市民的公共性が動搖をきたしたとき、それを前提に対抗的に成立した労働者の公共性メディアは、かえって存立の危機に直面し、『真相』の没落は決定的なものとなったのである。

SPD史上この時代は一般には、大衆組織政党としての完成・成熟期とされてきた。大衆組織の構築と膨張がすなわち、党としての躍進を表すものと理解されてきた。しかしそうしたSPDの外延の広がり力学において、宣伝メディアのはたした役割は、従来の研究では本格的に論じられることのなかった問題である。漫画メディア『真相』が驚異的な宣伝力を発揮した秘密と、やがて宣伝より統合に力点を置くメディアに変質した過程とを解きあかす、著者の手ざわは実に鮮やかである。その点『真相』分析は、本書におけるメディア分析の白眉をなすものであり、今後のこの種の研究に対して一つの範例となりうる出来ばえといえる。

第五章（新聞政党のラジオ観と労働者の公共圏の崩壊）は、体制政党としての安定と停滞を特徴とするワイマール時代のSP

Dに焦点をあわせる。共和国の運命を左右したとさえいわれる。「ニューメディア」ラジオが取りあげられ、それに対するSPDの取り組みの検討を通じて、「新聞政党」を脱却しえなかった党の対応の遅れと、そのラジオ政策の矛盾が明らかにされる。一九世紀的活字メディアのシステムを完成させたSPDは、まさにそのことよって、二〇世紀的電波メディアのシステムとの間の心理的ギャップを埋めることができず、ラジオというニューメディアのもつ可能性の前に立ちすくまざるをえなかった。またそのラジオ政策は、「国家政党」となったSPDのメディア戦略の矛盾を反映していた。二〇年代後半における『文化意志』誌を舞台とする放送メディア論争には、党の教養主義的伝統を乗りこえて、「教養の壁」をつき崩し、国民的な大衆文化を切り開くニューメディアの可能性に賭けようとする少数者の意見がきかれたが、党内の大勢はそうした主張の受け入れにはまったく消極的であった。市民的公共性のサブカルチャーとして構築された、自らの運動文化に固執するSPDは、伝統的な「運動文化」をもたないとナチ党にくらべ、新しい宣伝メディアの活用に著しく機敏さを欠いたのである。

ワイマル期SPDの直面した最大のアポリアは、「階級政党」から「国民政党」への転換の問題であった。放送メディアをめぐる党の政策と議論を考察する本章は、そうしたSPDの問題状況の深刻さを、いっそう鮮やかに浮かびあがらせることに成功している。やがてその付けを支払うことになる、SPDの暗い将来が暗示される。

第六章『「鈎十字」を貫く『三本矢』』の考察は、ナチス政権

成立の前夜の緊迫した情勢を前にして、大衆宣伝の神話とシンボルを喪失したSPDの無力な閉塞状況にむけられる。ここでは、シンボル「鈎十字」を掲げて荒々しく台頭したナチ党の、大衆動員の成功の秘密をつねに背景におきながら、議論がすすめられる。そして危機のぎりぎりの段階まで、SPDによるシンボル闘争の可能性を追求した二人の人物が取りあげられる。一人は、対抗シンボル「三本矢」の創案者、歴史の闇に忘却された謎の宣伝家セルゲイ・チャコティンであり、いま一人は、一九二八年の総選挙の勝利にも功績のあった、戦闘的改良主義者カルロ・ミーレンドルフである。ともにナチ党の躍進の秘密を見抜いて、シンボル闘争の必要を痛感していたが、一九三二年におけるSPDの「三本矢」シンボルの採用をめぐる経過と結末は、彼らの懸命な努力の最終的な挫折をしるすものであった。「三本矢」シンボルの採用とは、「自閉化」したSPD的労働者の公共圏を突きぬけて、「ワイマル国民国家」と一体化すること（「ラサールへの回帰」）を意味した。そうした展望にたったシンボル闘争、すなわちナチ党との「大衆心性の争奪戦」の遂行は、伝統的な啓蒙宣伝におお信をおく党指導部の抵抗にあつてはたされなかったのである。

本章もまた、知られざる宣伝家チャコティンを論述の中心に登場させることよって、SPDの正史を塗りかえる痛快な魅力を発揮する。共和国末期SPDのあがきもつかぬ手詰まり状態がかえって鮮明に描けるからこそ、このような忘れられた史実の掘りおこしが意義をもつのである。とはいえ本章では、「三本矢」シンボル闘争のはらむ可能性が手放して承認されているわけではない。その成功例とされる、一九三二年六月のヘッセン邦議会選挙

の「実験結果の検証」は、むしろシンボル闘争の直接的な効果を疑わせるような内容であり、問題の本質が別にあったことをうかがわせる記述になっている。本章をよんでややスッキリしない印象をもつとすれば、原因はその辺にあるとおもう。

終章（「シンボルの黄昏」）では、シンボル闘争の思想的背景として、『社会主義新報』サークルに属する人々の主張が検討される。ド・マンの「霊的体験としての社会主義」、ヘラーの「国民的社会主义」、ティリッヒの「社会主義的決断」を順次論じながら著者はそれぞれの議論に、「チャコティン—ミールンドルフによって大衆化された『三本矢』シンボルの思想的位相を読み込む」のである。だが「シンボル戦争」の必要を説きながら、彼らはなおかつ伝統的な教義としての文化を擁護した。それは、「インテリ党員」として当然に突きあたる限界であり、彼らが必然的に抱えこむ「シンボル闘争のアポリア」であったとされる。そのうえで著者は、現実の歴史的文脈にたち返って議論する場合には、彼らの主張への評価はおのずから異なることを、あらためて確認している。

*

従来のSPD史研究は、一九三三年をいわば一つの照準点とする構成をとってきた。本書も基本的にその伝統を継承している。第一次大戦前夜に組織的膨張の頂点に登りつめ、その後のSPDがいわばその遺産を食いつぶすかのように、次第にじり貧状態におちいり、退嬰の道をあゆむ、という全体的な構図においても、本書は格別の主張をしているわけではない。そうした大枠を前提にしたうえで、メディア史の観点からSPD史の再構成をこころ

みたのが、本書の主旨である。党史は「扇動政党↓宣伝政党↓大衆組織政党」という発展段階で新たに整理しなおされ、党の問題状況もそれぞれの段階に応じて新たな角度から再解釈され、全体としてこれまででない新鮮なSPD史像が描かれるにいった、ということができる。以下ではこの党の歴史に即して、評者なりの若干の注文をあげておこう。

まずSPD史、あるいはドイツ現代史としての完結性にこだわらなければ、一九一八—一九一九年の戦後革命期が実質的に抜け落ちていることは、問題になるかもしれない。『真相』のタイトル漫画からよみとれる「革命イメージの貧困、つまり革命シンボルの不在は、SPDの革命状況への対応をきわめて困難なものとした」といったコメントだけでは不十分なことは、著者しん承知しているに違いない。とすれば、十一月革命期に具体的に立ちいることをあえて避けた理由を、本書のどこかで触れておいてよかつたのではなからうか。党主導のメディア操作に焦点をしばって、その展開を追うという著者の視座は一貫している。本書の論述の整合性はそれによって保たれている。革命期とはまさに、既成政党の統合力が低下し、SPDのメディア操作そのものが有効に働かなくなる状況を予想させる。革命状況下のメディアとは、そもそも本書の狙いになじまないのか。それともそれは、革命シンボルを欠いた「大衆組織政党」SPD固有の問題として片づくものなのだろうか。

こうした本書の研究の視座は、SPD労働者運動史の最近の研究動向との接点を見いだしがたくしている一因でもある。いうまでもなくその近年の動向は、イデオロギーと組織中心の伝統的な

研究視角への反省から、日常生活史をふくめた、労働者文化運動と労働者文化の解明に力点を移動させているところに特徴がある。主体的存在としての労働者の生活文化の方に研究関心がむき、SPDの運動と組織から相対的に自立した労働者の心性と行動様式が分析の対象となっている。だが党のメディア操作に焦点をのぼった本書の視角からすれば、ここで論じられる党員大衆や労働者は、さしずめ党メディアの受け手、操作の客体でしかない。たとえば著者はそれを、「市民的公共圏への入場資格を持たず、しかも急激な工業化、都市化といった社会変動下で行き場を失った民衆」と表現する。漫画雑誌『真相』の読者像は「現代の都市大衆に限りなく近い」とされるが、この「感受する大衆」は、メディアの送り手側の認識であると同時に、大衆社会成立期の都市労働者の現実の姿に関する著者のイメージとも合致していよう。こうした受け手としての側面に偏した都市労働者像は、近年の労働者史研究が描きあげる労働者の実体像とくらべて、やはり内実の乏しいステロタイプという印象をまぬかれない。労働者文化の実体からいえば、一方的な受け手というイメージは結びがたく、メディアの送り手（党）との関係も、もっとダイナミックなものを考みこえてしまうことも確かだ。受け手の素顔がみえるメディア史は、その方法論もふくめて、基本的には今後の課題となるのである。本書にもすでに、その必要性を示唆しているくだりが三四三頁にみられるのである。

本書は、「宣伝政党」段階の党メディアのメッセージの主要な送り先を都市労働者とみている。これはSPD史研究の通説的な

見方とも一致する。とすると、党の宣伝が浸透しえなかった範囲についても著者は、従来の説に当然したがっていることになるのだろう。農村、カトリック、ポーランド人少数民族の労働者は、ドイツの労働者階級の重要な構成部分でありながら、帝政期SPDが最後まで支持基盤となしえなかった人々である。大戦前のSPDが「大衆組織政党」にまで膨張しとげる過程で、党の宣伝メディアは、彼らの存在をまったく意に介しなかったのであろうか。『真相』はどうだったのか。農村、カトリック、少数民族の諸問題は、大衆社会化と国民国家的統合とが交錯する世紀初頭の時代相をはっきりと映しだす鏡であった。『真相』の紙面分析には、これらの問題にふれるところがほとんどない。SPDの労働者の公共圏の完成をかたる場合、その局外にたった労働者が多数あったという事実、またそうならざるをえなかった理由にも目配りが必要とおもわれる。党公共性への自閉化を「宣伝政党」そのものの論理から説明しようとする、本書第四章の主旨とも、それはかならずしも矛盾しない。

SPDの支持基盤は、その後まったく広がらなかつたわけではない。大戦前夜から徐々にではあれ、工業化社会の申し子ともいえるべき新中間層への浸透がすすみ、ワイマール期にはSPDの知られざる横顔となる。現に本書二九七頁の数表からは、「新中間層の政党」としての映像さえ浮かんでくる。歴史的に意味のあるSPDの「国民政党」化とは、党の実質的な支持層が労働者のほか、この新中間層にまで広がることである、と評者は考えている。大戦以後の党は、確実にその一步を踏みだしていた。完成した労働者の公共圏がそれに大きな障害となつたことはわかるが、新中

問層への浸透（「国民政党」化）は、「大衆的公共性への参入」によって解決されるような問題だったのであろうか。新中間層の状況を大衆的公共性の氾濫のなかに安易に解消してきた従来の常識は、SPD史についても再考してみる時機にきている。

すでに紹介した「三本矢」シンボル闘争の「ヘッセンの実験結果」の検証（二九三～九八頁）は、本書の論述のなかでは特別な位置をしめる。他のテーマではかならずしも必要としない、メディア操作の効果を客観的に判断できるような論証が、試みられているからである。「三本矢」シンボルの場合には、ナチ党の前進を阻みえたかもしれない、という事実に反した仮定の問題がかかわるだけに、実験の検証が避けておれない。しかしシンボル闘争の直接的な効果はきわめて疑わしい、とするその結論はどう解釈したらいいのか。シンボル闘争の空転は、それを主導する側のかかえた問題の所在——組織改革と政策的裏付けの欠落、党内指導権争いへの矮小化——を明らかにする。と同時にまた、ヘッセンの有権者大衆がそもそも「鉤十字」や「三本矢」のシンボルなどに反応したのかどうか、といった受け手の側の問題をも突きつける。チャコティンのいう「教養なき九割の大衆」も、一つの時

代認識の表現だったとすれば、「ヘッセンの実験結果」の検証は、そうした彼の時代認識さえも相対化しかねないトゲをもっている。ワイマール末期SPDが直面していたのは、ナチ党との「大衆心性の争奪戦」であったとされる。メディア史を主題とする本書が、党のおかれた状況の核心をいいあてた言葉であるが、その状況をまるごと論証するために、個別の選挙戦を持ちだすことは生産的でないのかもしれない。「宣伝政党」時代をはるかな過去とする「大衆組織政党」SPDには、しょせん「ラサールへの回帰」はありえなかった、という宿命論が頭をかすめるのである。

本書は、SPD史という歴史の舞台を内容的に豊かにしただけでなく、その空間を広げ、情景を一新させた。その一端でも伝えられたかというもどかしさは、こうして結びを書きながらいっそう募るのである。付記したコメントも、構想力がささえる本書の論理性を乱すことにしかならないかと危惧する。ここに現代史の新しい領域と方法を開拓した著者が、歴史学の新たな可能性をもとめて何処をめざすか、注目するしだいである。

（B6版 三五二頁 一九九二年二月 弘文堂 二五〇〇円）

（大阪市立大学文学部教授